

Chim ↑ Pom

《May, 2020, Tokyo (大久保駅前) –青写真を描く–》

2020

コロナ禍で人の姿が消えた街の光を集めた作品です。今の「東京」を表現したともいえそうです。10年後、20年後に「TOKYO2020」という文字を見たときに私達が思い浮かべるのはオリンピック・パラリンピックでしょうか、コロナ禍でしょうか。

現代美術の要素の一つが「問いかけ」です。鑑賞者が「問いかけ」について考えるところまで含めて作品になります。Chim ↑ Pom は社会問題を積極的に取り上げます。時には批判されることもあります。「(鑑賞者の)リアクションに臨機応変に対応することで作品がみんなのものになっていく」とメンバーの一人は語っています。



ガイドスタッフ I

河原 温 「Today」シリーズ について

「カレンダー」?? 実は、これは「デイト・ペインティング」と名付けられていて、秘密は、この「絵」を制作した「日付」が描かれていることなんだ。作品をその日中に完成させたり、さらに、このTodayシリーズは、1966年から2013年まで“ず〜っと”制作され続けていたり、つまり作家が生きた「時間」をテーマにしているんだ！目の前に展示されている「箱」もよく見ると、制作した日の新聞が貼られた「作品保管箱」となっているんだ。他に、文字表記=作品を描いた場所（国）の公用語とか、使う色にも決まりがあったりするんだよ。



ガイドスタッフ M

河原 温

《One Hundred Years Calendar—20th Century "19,221 days"》
1985

作品が制作されたのは1985年、河原温の人生はこのあと2014年まで「29,771日」続いていきます。その間、丸印はひとつひとつの灯りのように繰り返されていったのです。それを留めて記す河原温の作品は、今日という日を深く追求しながらも心とらわれずに手放すことができる人のみがなしうる行為によるものではないかと感じました。

世界中の誰もがその意味を共有できる数字と丸印という記号の圧倒的な並びと対面し、人の人生は限られた時間だと知覚する覚悟は少しの怖さと共に清々しさも私の心に届けてくれます。

ガイドスタッフ 〇



大岩オスカール

〈隔離生活ドローイングシリーズ〉について 2020

さあ、空想の旅に出かけようか！コロナ禍の隔離生活中に自宅の小さな机からオスカールが発表した連作です。いつもは活気に溢れるこの場所、行くはずだったあの場所一。突然生活が一変した中、どれも一時停止ボタンを押したようにひっそり。けれども私には、日常への「再開ボタン」が押されるのを今か今かと待っている、前向きなエネルギーに満ちているようにも思えます。さてあなたなら、どこに行きますか？空想の旅はいつでも出発可能です。私は遠方の実家へ、、、久々に両親と畳でごろごろ昼寝、最高です。



ガイドスタッフ T

塩見允枝子(千枝子)《音楽の小瓶 #1ー#14》1993

「音楽」はどこで生まれるのでしょうか？ 作曲家の頭の中？ 五線譜の上？ 「音楽」はどこから聞こえてくるのでしょうか？ コンサートホールから？ 演奏家の指から？

塩見允枝子はそんな場所から「音楽」を自由に連れ出します。メッセージや詩とともに様々なカタチを変えて世界中に届けられます。時にはこんな小瓶に詰めて……。この小瓶を見つけてラベルを読んだ人は、作曲家となり演奏家となり観客となり、それぞれの「音楽」を楽しむことができます。

開けてみたい小瓶は見つかりましたか？



ガイドスタッフ S

フルクサス 《フルックスキット》 1964

フルクサスの活動は、演奏、パフォーマンス、展示、複数制作の印刷物やオブジェなど多岐にわたります。フルックスキットには、フルクサスメンバーによるスコア（楽譜）を記したカード、オブジェ、インストラクション、写真、いろいろ入っています。これらは、フルクサスのまとめ役であったジョージ・マチューナスによって集められました。また、フルックスキットのエディションは、新しい作品が加わるごとに中身も別のものになっていきました。

ガイドスタッフU



ナムジュン・パイクの「ビデオアート」について

ナムジュン・パイクが、ビデオアートをはじめたきっかけは、当時住んでいたケルン（ドイツ）の自宅のトイレがつまったのを見て、物質への限界を感じたことからだそうです。これからは物理的なものではなく、電子や情報の時代になると予感したようです。

テレワーク、オンラインショッピングが当たり前のようになっている私たち現代人にとって、約50年前のパイクの作品は少し、レトロに感じますかね？

パイクのビデオアートは、テクノロジーのなかにも人の手の痕跡が残っているような感じがして、私は好きです。



ガイドスタッフ M

三島喜美代

《Comic Book》1976-81、《Package 82-A》1982

そこのあなた、ちょっと見ていきませんか。

キャプションに素材は「陶土」と書かれていますが
もしやこれは……。触ってみたくくなりますよね。
コミック雑誌、新聞、段ボール箱、情報を伝えるため、
何かを運ぶため、現代社会にはなくてはならないもの
であるのに、すぐに捨てられてしまう消耗品。三島は
見た目を忠実に再現しながら、朽ち果てない素材に作り
替えてしまいました。

「私の作品は美術館に展示すると清掃員さんがゴミだ
と
思って割ってしまう。でも陶器にはもろさ、不安感、
危機感もあるのがいい。」と彼女は語っています。



ガイドスタッフS

三島喜美代 《Memory》

ギュッと束ねられた、ノートと紙。大掃除後の光景でしょうか？ これは、三島喜美代が結婚前に絵画を学んだ画家であり、夫となった三島茂司の思い出の品を表した作品です。三島は、消費され、捨てられるゴミを本物そっくりの陶の立体作品にする表現で知られています。そんな「ゴミ」に囲まれて、ひっそりと佇む、一見ゴミのようだけど、実は大切な情報や思い出が積み重なったこの作品。

私には、ものごとが時と共に流れ、風化していく現実を突きつけられたようにも感じられ、ドキッとしてしまいます。

ガイドスタッフ T



郭 徳俊 「大統領と郭」シリーズについて

変身してみたいと思ったことはありませんか。
この作品、顔の上半分は「TIME」誌に載ったアメリカの大統領。下は鏡に映した郭の顔です。誰でもが知っている人物でも、他人と組み合わせることによって、まったく別の人物に生まれ変わります。貴方も憧れの有名人と顔を合成してみませんか。意外な人物に変身できるかもしれませんよ。このシリーズは1974年フォード大統領から始まりました。もしもヒラリー・クリントンが女性大統領になっていたら。想像する私たちの頭の中で、郭のユーモラスな作品が出来上がってきます。



康夏奈（吉田夏奈） 《花寿波島の秘密》 2013

ぽこぽこっとかわいらしい形をした、大小2つの無人島、花寿波島（はなすわじま）。海岸から眺めただけではわからないこの小さな島の秘密を、康夏奈さんが教えてくれます。

康さんはこの作品をつくるために、20日以上も海に潜りました。そして島をぐるぐるまわって見たものを、色鮮やかなクレヨンで大胆かつ繊細に再現しました。

康さんが海の中から見た島の景色が、今度は私たちのまわりを取り囲みます。作品の真ん中に立ってみてください、そこは一瞬にして海の中です！



ガイドスタッフ K

康 夏奈（吉田夏奈）

《No dimensional limit anymore》 2011-14

描かれた風景が山型に盛り上がって、まるで瀬戸内に浮かぶ島々のようです。康さんは、複雑な地形と豊かな自然に恵まれた小豆島に魅せられて、島に移り住み作品を制作しました。小豆島に住む方々は「これは私たちの島だ」とすぐに解るのだそうです。島のDNAが埋め込まれているのですね。

島々を見上げたり見下ろしたりしながら歩くと、まるで鳥になって空から眺めている気持ちになりませんか。深い緑や色づく木々、季節によって変わる景色も見えますね。雄大な自然が、床や白い壁の余白にまで広がっていくように感じます。

ガイドスタッフS



康 夏奈（吉田夏奈）

《SHAKKI - black and white on the lake》 2009

人の気配のない雪景色。寒そうなここは何処？ここはサンタクロースの国といわれるフィンランドの森の中の凍った湖。作品を見ていてください。サンタを手伝う小さな妖精のようにせっせと動き回る人がいます。

たった一人で黙々と、ひたむきに作っているのはSHAKKI、フィンランド語でチェスを意味します。この人、康夏奈さんがレジデンスアーティストとしてフィンランド滞在中に制作した作品で、童話を見ているような気持ちになります。また雪が降ってきそう、作品は大丈夫？いえいえ、彼女はそんな事はお構いなしみたい！その姿に、自分の雪の日のワクワクも重なります。

ガイドスタッフY



太田三郎 《Seed Project》 1991-2015

切手？いえ、和紙に挟まれた小さな植物の種子です。10年以上にわたり採集され、規則正しく並べられた種子は、形や大きさが千差万別で植物の多様さに気付かされます。採集場所は練馬、広島、ソウル、北京などでその土地や人々の記憶、思い出をも標本にしているかのようです。採集した日があなたの誕生日、場所が生まれ故郷だったらどうでしょう？特別で大切な種子に感じられませんか。そして私は、この種子が切手のように自由に世界中を旅し、新しい大地に根を下ろし、その記憶と共に命を繋いでいくことを想像せずにはいられません。



ガイドスタッフ T

太田三郎 《POST WAR 56 無言館 中村萬平》 2001

有名人の肖像切手かな？小さな字に目をこらして見てみてください。先の大戦で亡くなった青年の自画像だとわかってきます。本物の絵は収蔵先の美術館でしか見られませんが、切手であれば、いつでもどこへでも「作品」を届けることができます。作家はこの仕組みに注目しました。なるほど、もっと私たちの目に触れやすくなりますね。

遺族の悲しみは今も続いているはず。「戦後56年」目に制作された〈POSTWAR56 無言館〉シリーズは、戦後には終わりが無いんだ、と気づかせてくれます。



ガイドスタッフN

サム・テイラー＝ジョンソン（ウッド）

《Crying Men》シリーズについて

部屋一面に大小様々な写真が掛かっています。カラー写真もあれば、白黒写真もありますね。「この人知っている！」という方もいるのでしょうか。

これらは作家のサム・テイラー＝ジョンソン（ウッド）が俳優たちに泣く演技を依頼して撮影した作品です。そうと知ってから改めて見てみると、男たちの表情はもちろん、その服装や写り込んだ背景などから一人一人の物語が想起され、映画のワンシーンのようにも思えてきます。あなたはどの物語が気になりますか？
あるいは、こんな涙は嘘だと思うのでしょうか？



ガイドスタッフ A

デイヴィッド・ホックニー

《『C.P. カヴァフィスの 14 編の詩のための挿絵』》

1967

こちらは、ロサンゼルス of 明るい陽光を感じさせる邸宅やプールを描いた風景画で知られる、ホックニーの作品です。この作品ではエッチングという版画の技法を用いて、モノトーンで描いています。目を引く柄の毛布をかけて無防備に狭いベッドに眠る青年二人。ぶつかる肘や触れそうな手の位置を見れば、二人の間には何も境界線がないのだろうなと想像できます。詩の通りならば、明け方 4 時近くまで一晩中飲んでいた彼らの、いつときの安らかな寝息が聞こえてきそうです。



ガイドスタッフ H

マルレネ・デュマス 《ツイステッド》 1996

白く明るい展示室にもかかわらず、ゾワツとした。どこだかわからない空間にたたずむ少年のような人物。なんといっても恐ろしいのは、か弱そうな裸をさらしつつ、不敵な、官能的ともいえる笑みを私にむけていること。作品名はねじられた上半身だけでなく、その歪んだ表情をも指しているのか・・・？

アパルトヘイト（人種隔離政策）時代の南アフリカに白人女性として生まれ育ったデュマスの作品は、性、暴力、死、そして人種問題を想起させるモチーフがよく登場します。しかしそれは言葉では説明し尽くせない曖昧さを常にはらんでいるのです。



ガイドスタッフF

小林 正人 《Flash》について

このような「手がき」を美術用語では「ドローイング」と言います。線による表現を一般的に呼びます。だからこそ思いがまっすぐにシンプルに表れるものです。

作者が描いたのは「この星のモデル」と呼んだ女性の姿。白いキャンバスの上に彼女が横たわったその瞬間、次の瞬間には消えてしまうかのように強く存在するものの感覚、輝きを、彼は描き出したいと願いました。瞬間を永遠にしたいと発せられたその思いは指先に伝わり、そのままに現れたのがこれらのドローイングです。



ガイドスタッフ 〇



ガイドスタッフO

福田尚代 《翼あるもの》について

「ご本は大切に。折ったらいけません。」ママの声。
いいえ大丈夫！福田さんは本を傷つけたりしません。
本が大好きで、とても愛しています。読み終えた本を
一枚ずつていねいに折ります。本の中へ入って行く
ように。展示ケースの中で美しく立っていますね。
近寄って見て下さい。

散りばめられた沢山の文字の中から最後に残された文
が浮かび上がります。思いがけない文字、偶然現れた
文章。作品との対話を楽しんで下さい。本どうしのお
しゃべりが聞こえるかもしれませんね。身近な物に
温かい目を注ぐ福田さんの代表作です。

クリスチャン・ボルタンスキー

《D家のアルバム、1939年から1964年まで》 1971

タイトルのD家、とはデュランさんというある家族のことで、1934年から1964年のデュラン一家のアルバムから作家が150点写真を選んで左から縦に時系列順に並べたのがこの作品です。作家のボルタンスキーは父親がユダヤ系フランス人で、ナチス・ドイツからパリが解放された1944年に生まれました。自身は戦争やホロコーストを体験しなかったものの、作品の多くには濃厚な死のイメージが漂っています。写真の中の家族は楽しそうな笑顔を浮かべているのに、薄暗い美術館の白い壁に並んでいる写真を見ていると、どことなく不安な気持ちになるのは私だけでしょうか。

ガイドスタッフ S



クリスチャン・ボルタンスキー
《死んだスイス人の資料》 1990

これはとても大きな作品ですね。作者のボルタンスキーは1944年にナチス占領下のパリでユダヤ系フランス人として生まれました。両親や親戚から戦時中の厳しい体験を聞いて育ったと語っています。

近づいてみてみましょう。写真が貼られた沢山の缶が積み重ねられています。実はこの缶、フランスでは一般的なビスケットの空缶で、写真はスイスの新聞の死亡欄から切り取られたものなのです。

若い人も年配の人もいますね。誰にも訪れる死。缶の中には思い出や記憶、生きた時間そのものが入っているように思えます。



ガイドスタッフ Y

レベッカ・ホルン 《バタフライ・ムーン》 2008

5分間待ってください。この作品、動きます。
真ん中にあるのはモルフォ蝶の羽根です。熱帯に
生息し、強烈な日差しのもとに飛び交うチョウです。
でもここで表現されたのは「月（夜）」と「葉の
落ちた枝」、そして「ブルーメタリックの羽根」。
見方によっては「死」を連想します。ホルンはチョウ
の羽根を動かすことで彫刻に命を吹き込もうとして
いるようです。多くの詩を作り、「文字を書くことと
彫刻を作ることは分けられない」と語るホルンに
とって、吊り下げられた青いペンシルは「詩」を
象徴しているのかもしれませんが。



ガイドスタッフI

アピチャッポン・ウィーラセタクン
《エメラルド [Morakot]》 2007

映画監督でアーティストでもあるアピチャッポンが、故郷のバンコクにあったホテル「モラコット」（タイ語でエメラルドの意味）を舞台に制作しました。ひと気のない客室には白い羽毛のようなものが浮遊して、あたかも会話をしているように見えます。音声はかつてこのホテルに滞在した人々の記憶。聴いている私たち自身もその記憶の共有者として作品の一部となってゆく、そんな感覚にさせられます。

ガイドスタッフY



保田春彦 《聚落を囲む壁Ⅲ》 1994-95

タイトルにもあるように、この作品は人々が暮らす集落を取り囲む壁にも、密集する家並みにも見えます。保田が10年暮らしたフランスやイタリアの城壁に囲まれた集落から着想したのかもしれませんが。赤錆色は、集落の過ぎた時の経過にも、そこで暮らす人々の温もりにも感じられます。静かな佇まいですが、今にも壁が動き出しそうな気配もあります。あなたはこの作品からどのようなイメージを持たれましたか？



ガイドスタッフY

鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音 (おとだて)」 and "nozo mi"》

2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフ Y



アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988

直径約 4m！重量約 5 トン！建築や舞台美術も学んだイタリアの彫刻家ポモドーロらしいスケールの大きさです。大きさだけでなく二つに分かれた円盤に刻まれた深く鋭い裂け目のような形にも注目してみてください。天の星々の位置やその動きを知るためにつくられた中世の天球儀がヒントとなったこの作品、かつては 24 時間かけてゆっくりと回転していました。

今はこの空間で天気や時間によって変化する太陽の光を受けてさまざまに違った表情を見せてくれます。

さて、今日の空模様は？



ガイドスタッフ S

オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

見上げた絵の中からオノ・ヨーコが語りかけてくるようです。あなたに届いた言葉はありましたか？インストラクション（指示）・ペインティングは、彼女から届いた言葉とあなたの抱いたイメージが響き合って成り立つ作品です。60年も前にオノ・ヨーコが始めたインストラクション・ペインティングは、一つ一つの言葉が文字通りキーワードとなり、現在も私たちの想像の扉を次々と開け続けて行きます。

追伸：メインエントランスを出て左側、野外のオノ・ヨーコ《クラウド・ピース》もご覧ください。



ガイドスタッフ K

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？



ガイドスタッフ T

宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ
それは永遠に続く》 1998

照明のない展示室に足を踏み入れ、奥でぼわんと赤い光を放つこの作品を見たとき、どんな印象を受けましたか？ 作品名の「それ」は作品そのものを指しています。変化し、関係し、続くこと。国境や人種といった枠組みを越えて共有できること。宮島作品で繰り返し語られるテーマです。

ちなみに今日の前にある作品は、2019年のリニューアルオープンにともない、一部修復されたものですが、約20年の間に1728個のデジタルカウンターは明るさに個体差が生じ、点かなくなったものもあったそう。私はこれにも命のようなものや時間の流れを感じてしまうのです。



文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。



ガイドスタッフ〇